

十二月廿三日

官制改定ノ詔

詔勅

朕惟フニ經國ノ要ハ官其制ヲ定メテ機關各其所ヲ
得ルニ在リ内閣ハ萬機親裁專ラ統一簡捷ヲ要ス
シ今其組織ヲ改メ諸大臣ヲシテ各具重責ニ當ラシ
メ統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシ以テ從前各省太
改官ニ隸屬シ上申下行經由繁複ナルノ弊ヲ免レシ
ム乃各部ニ至テハ官守ヲ明カニシ以テ濫弊ヲ除キ
選叙ヲ精クシ以テ才能ヲ待テ繁文ヲ省キ以テ淹滯
ヲ通シ冗費ヲ節シ以テ急要ヲ舉ケ規律ヲ嚴ニシ以
テ官紀ヲ肅ニシ徐クニ以テ施政ノ整理ヲ圖ラント
ス是レ朕カ諸大臣ニ望ム所ナリ中興ノ政一タビハ



進一シビハ退クハカラス華ヲ去リ実ヲ務メ綱舉
リ目張リ永遠継クヘカラシム諸臣其レ各朕カ意ヲ
體シテ奉行スル所アレサニハ年十二月
廿三日内閣

太政大臣奏議

臣躬台鼎ノ重キヲ荷ヒ日夕憂懼以テ報効ヲ圖ル嚮
キニ親シク陛下内閣ヲ改制スルノ旨ヲ承ク幸ニ微
衷ヲ披キテ以テ聖德ヲ仰クノ機ヲ得タリ竊ニ思フ
今日ノ事前途猶遠シ立憲ノ基ヲ建テ以テ中興ノ業
ヲ終ヘントセハ區々前轍ニ因習スルノ能ク成スヘ
キ所ニ非サルナリ維新ノ初陛下幼冲臣寵撰ヲ叨リ
ニシ大政ヲ董督ス實ニ已ムコトヲ得サルニ出ツ蓋
シ大寶ノ令唐ノ尚書省ニ倣ヒ太政官ヲ以テ八省ヲ
統ヘ八省ハ左右辨ニ分屬シ官符ヲ得テ施行ス明治
二年職貢令ヲ定メ六省ヲ置クニ當テ仍大寶ノ制ニ
依リ太政官ヲ以テ諸省ノ冠首トシ諸省ヲ以テ隸屬
ノ分官トス此レヨリノ後諸省ハ專ラ指令ヲ太政官

ニ仰キ太政官ハ批ヲ下シテ施行セシソ凡ソ文書ノ
上奏スル者ハ皆太政官ニ經由シ往復ノ問省ノ寮ニ
於ケルニ均シ此レ蓋シ一時ノ權宜ニシテ獨親政統
一ノ體ヲ得サルノミナラス亦各省長官ノ責任ヲ輕
クシ徒ニ曠滯ノ弊ヲ為ス者ナリ方ニ今陛下聖德日
ニ躋リ大政ヲ綜攬シ事ヲ内閣ニ視諸宰臣ヲ引見シ
文武ノ務親シク奏議ヲ聽キ玉フ而シテ中外ノ事盤
錯多端官制宜シク更張スヘク財政宜シク節度ニ就
カシムヘク要務ノ經畫施措スヘキ者一ニシテ足ラ
ス此レ宜シク時宜ヲ斟酌シ古今ヲ變通シ太政官諸
省ニ冠首ナルノ制ヲ改メ併セテ太政官諸職ヲ廢ミ
内閣ヲ以テ宰臣會議御前ニ事ヲ奏スルノ所トシ萬
機ノ政專ラ簡捷敏活ヲ主トシ諸宰臣入ラハ大政ニ

參シ出テハ各部ノ職ニ就キ均シク陛下ノ手足耳目
タリ而シテ其中一人ヲ撰ヒ專ラ中外ノ職務ニ當リ
旨ヲ兼ケテ宣奉シ以テ全局ノ平衡ヲ保持シ以テ各
部ノ統一ヲ得セシムヘシ此レ乃祖宗簡實ノ政親裁
ノ體制ニシテ立憲ノ義亦是ニ外ナラス此ノ如クニ
シテ綱紀振張シ各部宰臣均シク其責ニ任シ用ヲ節
シ實ヲ務メ以テ立國ノ目的ヲ達スルコトヲ得ハ天
下ト之ヲ公ニスヘク宇内各邦ト之ヲ競フヘク陛下
中興ノ大業始メテ成緒ヲ終ヘ微臣犬馬ノ勞亦與カ
リテ餘榮アラシ若シ其人ニ至テハ必陛下ノ聖鑑ニ
由リ大局ニ明達シ時務ニ精鍊ナル者ヲ得テ以テ之
ニ任スヘシ而シテ中外多端ノ機務ニ當ルカ如キハ
實ニ臣カ堪フル所ニ非サルナリ伏テ願クハ陛下臣

カ誠ヲ察シ今ノ時ニ及テ内閣ノ組織ヲ改メ併セテ
臣カ職ヲ解キ臣ヲシテ獎勵賛襄ノ微忠ニ負カサ
シメハ獨臣カ幸ノミニ非サルナリ言非常ナルカ如クニ
シテ實ニ時宜ノ已ムコトヲ得サルニ出ツ惟タ陛下
之ヲ斷シ玉ヘ謹奏
十八年十二月日閣
官報廿二日ニ載ス

十二月廿六日

各省事務ヲ整理スルノ綱領ヲ定ム

内閣總理大臣ヨリ各大臣ヘ達

本月二十三日ノ聖詔ヲ奉體シ左ニ各省事務ヲ整
理スルノ綱領ヲ舉ケ以テ將來ノ標準ヲ示ス各省大
臣此範圍内ニ於テ便宜斟酌シ案ヲ具ヘテ閣議ニ提
出スヘシ
十八年十二月二十六日

一、官守ヲ明ニスル事

我カ官制ハ草創ノ餘未タ限ルニ定員ノ制ヲ以ラセ
ス濫弊徒ラ生シ官愈多クシテ務愈塞ナルコトヲ免
レス十年ニ一タヒ官制ヲ改メ裁部省ヲ廢シ内務省
ニ併セ各省奏判官ヲ減シテ其過半数ヲ罷メタリ然
ルニ當時定員ノ制ヲ設ケテ以テ將來ヲ防範セサリ